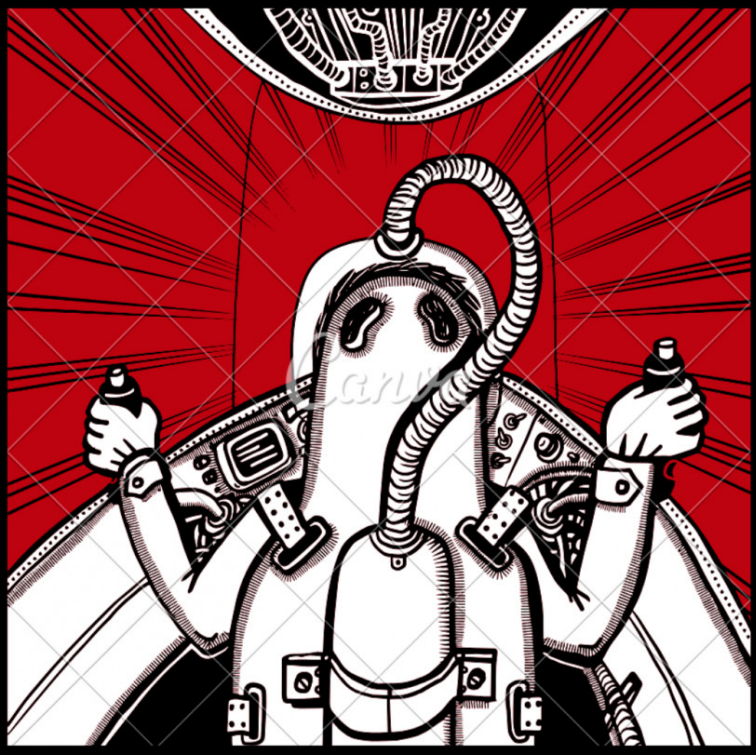
"Ichban saisho no Ehon to iuka Dowa sakuhin ni narimasu."
Kininattara Yonde Mite Kudasai, Yoroshiku.

WHO IS THE GREATEST?

一番強いのは誰?



ハァモニィベル

目次

表紙 1
一番強いのは誰？ 2

奥付
奥付 9

表紙

ハァモニィベル作

一番強いのは誰？

一番強いのは誰？

＊

チノウは、この世界にそれほど沢山は住んでいませんでしたし、どちらかといえば少ないほうでした。

でも、わりといろんな所にその一族が存在しています。

普段ベイカー街に住んでいて、持ち込まれた事件を調べて解決するものもいましたし、

世界のあちこちで人の病気を治療するものや、紛争を裁定するもののなかにもいますし、

学生を教えながら興味のあることについて研究したり学会をつくっている者のなかにもいたり、

選挙に出たがるものもいれば、お金もうけの方法を考えるものなどは少ない中にもわりあい沢山おります。

チノウはこの世界では皆たいてい、良い暮らしをしていましたから、かなり強いことは誰もがみとめることとなっておりましたが、どういうわけか、チノウの一族なのに、一向に良い暮らしができない者がごくごくわずかですがいたのです。これは、チノウをもってしても理解ができない不思議なことでした。

＊

ある日、その理由を告げるものがおりました。運です。この世界にいて普段は隠れているのにとつぜんあらわれては、面食らわせて、泣かしたり笑わせたりするのが好きなたちでしたから、ここにもやはり突然あらわれて、突然告げたのでした。

「君はぼくに勝てないってことさ」、運は突然あらわれるとそう、チノウに云いました

「チノウくん、きみの一族は、みな自分の力で成功してると思ってるようだが、実はぼくらのおかげなのさ。その証拠にチノウの一族じゃない凡庸の一族の者だって、ぼくがその気になればいくらでも成功するじゃないか。その反対に、君のような優れたチノウでも、ぼくがその気にならなきゃ、一向にうだつが上がらないだろう。はははは。」そう言って、運は笑いながら、また見えなくなりました。

”きみは僕に勝てない”といった運の言葉を思い出し、チノウは悲しむよりも、なるほど、と頭を整理しました。そしてすぐに疑問を１つ浮かべたのです。

では、いったい、運に勝つものはいるだろうか？

チノウを磨けばそれだけこの世界ではうまくやってゆけそうだけれど、たとえ成功しても、運のご機嫌しだいで天地が逆になることはたやすい。それに、チノウがせっせと長い時間をかけて積み上げた緻密な計画や、その成果も運は一瞬で壊すことができるものなぁ・・・・・・・

・・・・・・、ん？ だが、待てよ・・・。

・・・・・ん！？ と、ここで何かピンときたチノウはさすがでした。ひらめいたのです。

この世界に運より強いものが居たのです。

つぎのページを見る前に、君もちょっと考えてみて。この世界で運よりも強いものとは何でしょう。

＊

ぼくらチノウが長い間かけて築いたものも、一瞬で壊せる運とは恐ろしい奴。だが、そんな運もまた、時間には勝てないじゃないか！

そうチノウは考えました。だって、最悪の運命に落込んで、ある若者が死にそうになっても、生きていれば落ち続けていることなんてないもの。雨の日も雪の日も風の日も、絶対に晴れの日が来ることは阻めないし邪魔できないんだから。運が上がりつづけることもない代わりに下がり続けることもできないじゃないか。

そうだ！ 運は時間には勝てない。

さっそく、時間にこのことを伝えて表彰し褒め称えようと、チノウは時間のもとをたずねてゆきました。すると、実直な時間は、昔ほど穏やかに日々が送れなくなって、最近はコセコセと忙しいのだと嘆きながら話を聞いてくれました。

話すあいだ、時間の末娘である時の女神が紅茶を持って入ってきました。時の女神はいつも年頃を気にしているが、いつ見ても変わらずとても美しい。その美しい瞳で見つめられると、なんだかちょっと照れてしまいます。

はなしを聞き終わると、時間は目を閉じたまま眠ってしまったのかと思うほど沈黙をつづけました。そして、ゆっくりと目と口を開いたのです。出てきたのは、とても意外な言葉でした。

「わしは運には勝てるけれども、君には勝てんのう」と、そう低く響く声で言うのです。
「わしが長くなればなるほど、運は上下させられる。けれど、わしが長くなればなるほど、君は成長し、腕を上げ、仕事を成し遂げ、問題を解決してしまうからの。運さえ邪魔しなければの。」普段はクールな時間が、めずらしく温かな微笑みを浮かべてそう、チノウに言いました。

だとしたら、・・・チノウと運と時間というのは、ジャンケンみたいで、どれが一番とは云えないな、・・・と、チノウがひとり頭の中で考えをまとめていると、―。

「わしはの、君のことをの、そっと、もうずっと永く、静かに見続けてきた。永く人々を見続けてきたわしだからのぅよく解ることがあるんだのぅ。チノウの一族のなかでの、運に見放されてもの、それでもなおの、美しく気高いその心をの、みずから歪めることもなく、ひとから汚されることもなく、過酷な時間のなかでのぅ、なお一層その輝きを増してきた君はの、永いながい時の中でものぅ、なかなかに見つけるのが難しいのだのう。
わしはのぅ、じつはチノウの一族ほど愚かな存在もないのう、としみじみ思うておっ

てのぅ、運に恵まれれば恵まれるほどにのぅ道を踏み誤り、方向を修正すること能わぬ、何とものぅ愚かな一族じゃのぅ、との。

だが、つねにいつでも、そんな者ばかりでは無いようだの。はっはっはっは。」

時間のしみじみとした腹からの笑い声が響いた。

「今日表彰されるのは君の方だのぅ」更に時間は意外な言葉をつづけました。「じつは、娘がのぅ、ずっと君に嫁ぎたがっていたのじゃが、運の奴が娘にしつこく求婚しておっての。知っての通りわしの娘は運以上に神出鬼没じゃでの、皆が欲するが、滅多に正面から姿を現さぬし、その上早くて誰も背中を捕まえることができんのじゃ。その娘がのう、君に嫁ぎたがっているというので、運の奴め君をずっと妨害していたんだろうのぅ。わしは、時間をかせいで君が来るのをずうっと待っておった。そろそろ来る頃じゃとも思っていたがのぅ。」

そこで言葉を切ると時間は少しも急がないといった風情で香りのよい紅茶を飲み干した。そして――。

「どうかね、もう娘は今日にでも君に嫁ぐといってきかないのだがのぅ、君は、わしの末娘を連れ帰ってもいいという気持ちはあるかのぅ？」

そのとき突然、

運のやつが、もの凄い形相で現れて、チノウの口をふさごうとした。けれど、いつの間にか、たっていた時の女神が、襲いかかってきた悪運の、その背中を、思いっきり突き飛ばしていた。

何といっても、誰にも止められない早さで動く《時の女神》なのだから。悪い運のやつは、運悪く、もの凄い形相のまま、もの凄く遠くまで――まるで破り取られた紙が丸められて、思いっきり放り投げられたときみたいに、しかも、その速度が落ちるどころか、あっという間に――天空の果てまで、跡形もなく消え去っていった。

一瞬で空が晴れわたり、時間はまた温厚な微笑みを浮かべ、やって来た時の女神は頬

を真っ赤に染めた。

　チノウは、つい頭をフルに回転させたが、それは余計なことだった。答えはあまりにも単純かつ純粋だったから。

「大切なのは優しい辛抱と素直な勇気だけね」
「それと、信念とね」
いつの間に来たのだろう幸福の一族たちの囁き声がした。

　時の女神のそっと差しだした手を、ためらわずにしっかりとチノウは握りしめた。そのときには、すぐ目の前に、輝く美しい瞳が正面からこちらを見つめていた。限りなく深いその瞳の奥をさぐりあてようとしながら、チノウは生まれて初めて、　”今ここ”に自分がいるという幸福を、胸一杯に感じた。

（END）

奥付

奥付

一番強いのは誰？

https://puboo.jp/book/100972

著者：ハァモニィベル
著者プロフィール：https://puboo.jp/users/harmonybell/profile

感想はこちらのコメントへ
https://puboo.jp/book/100972

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/100972

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（https://puboo.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ

一番強いのは誰？

著　　ハァモニィベル

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社